

## 講演概要

# 「天文、和算と蘭学と：仙台藩天文暦学の世界」

広島大学医学部 川和田晶子

仙台藩は、澁川春海の体系化した天文暦学と神道を継承する誉れ高い学統として、明治初期までその命脈を永らえた歴史を有している。江戸中期の仙台藩士・戸板保佑は、天文暦学と和算の才能で全国にその名を知られた学者であったが、最晩年の1784年に、自身の学問人生の集大成として専門分野の書籍編纂を行った。「関算四伝書」と「天文四伝書」と呼ばれる、二つの近世日本の科学古典籍コレクションとして現存している。「関算四伝書」は、保佑が関流和算に入門して学んだ算法を記録したもので、現在は宮城県図書館に所蔵され、近年に和算研究者によって研究が行われ、資料の影印が出版された。

「天文四伝書」は、保佑が18世紀の国内に広まっていた天文学、暦数学、陰陽学、測量学と地理学に関する一級の和漢古典籍を集めて書写したもので、「関算四伝書」と双璧をなすものである。しかし第二次大戦後に仙台を離れ、現在は天理大学附属図書館に収蔵されているため、長らくその内容を知られることがなかったが、悉皆的な書誌調査に着手したことによって、その全容が段々と明らかになってきている。

本講演では、「天文四伝書」に関する最新の調査成果を踏まえつつ、保佑の選んだ当時最先端の科学書と、その中に散在する本人の記録を通して、特に天文暦学、和算と初期蘭学の記述から18世紀の仙台藩における天文暦学研究の全体像を提示する。

明末清初の中国でイエズス会宣教師が編纂した「崇禎暦書」に関する保佑の理解、関孝和と中根元圭を初めとする関流和算家からの影響、また仙台市博物館所蔵の「天文成象図」と「坤輿萬国全図」屏風を19世紀に製作した、岩出山藩の町人学者・名取春仲が保佑から受けた影響を中心に解説する。江戸時代の最先端の科学とその情報は、仙台という一地方を超えて、全国的なネットワークで繋がっていたことも浮かび上がり、あらためて保佑が築いた天文暦学分野の学問的な基盤の偉大さを偲ぶことができる。